

第5章 ゲアン省の民家

チャン ティ・クエ・ハー 山田 幸正

はじめに

ゲアン省は、北にタインホア省、またラム川を境に南にはゲティン省にそれぞれ隣接し、ベトナムの北部と中部の境に位置する。東側は南シナ海に面し、その西側のチョウソン山（長山）の山系にはラオスとの国境がある。ベトナム共産党の創立者で、ベトナム民主共和国の初代国家主席となった革命家ホー・チ・ミン翁は、本省ナムダン県キムリエン村に生まれた。歴史上、この地域は、北部に興った諸王朝が10世紀頃から開始する南方進出への試みに際して、常にその最前線となっていた。また、フランス植民地時代においても開発・開拓の拠点の一つで、アメリカとの戦争の時代には激しい爆撃を受けた。

ゲアン省はベトナム全土で最も広い面積を有する省（16,381km²）で、その人口は285,8265人（2001年）である。現在、省域は1市、18県に行政的に区分されている。18県のうち、主に平地が占めるのは8県で、残り10県は山間部にあり、全体的にみて、省域の8割ほどが丘陵・山岳の占める地形となっている。気候的には年間二つの季節からなり、農業生産的にみて比較的厳しい地域である。すなわち、4月から8月の間は温度の高い乾燥した南西からの季節風が吹き、9月から3月にかけては温度の低い湿気を含んだ東北風が吹く。

表2：ゲアン省の伝統的民家に関する第一次調査 概要

	QuynhLuu県	DoLuong県	DienChau県	YenThanh県	NghiLoc県	HungNguyen県	NamDan県	ThanhChuong県	計(%)
調査対象家屋 (棟)	44	54	42	63	40	38	51	52	385(100)
屋根									
切妻	43	10	36	60	32	34	39	46	300(78)
入母屋	1	43	3	2	8	4	12	7	80(21)
その他/不明		0/1	1/0	0/1					1(0.2)/2(0.5)
間口									
5間以上	36	22	16	40	3	9	8	23	157(41)
4間	7	4	9	12	3	7	10	10	63(16)
その他/不明		28/0	14/2	9/0	33/1	22/0	30/0	18/1	154(40)/4(1)
保存状態									
良好	9	28	12	13	9	18	24	26	139(36)
中	27	24	23	40	28	18	21	20	201(52)
悪	8	0	6	10	3	1	5	5	38(10)
不明						1		1	2(0.5)
架構形式									
II	2	8	0	3	1	1	2	11	28(7)
III(III(1)/III(2))	19/1	30/3	6/1	3/0	24/0	31/1	34/1	16/0	163(42)/7(2)
V	16	5	18	26	9	0	1	2	77(20)
中柱	0	1	8	25	0	0	0	2	36(9)
ゲアン形式/不明	5/1	6/1	1/8	2/4	0/6	1/4	3/10	13/8	31(8)/42(11)
小屋組									
A	12	4	5	4	0	2	4	1	32(8)
B(東)	1	11	1	4	4	3	11	3	38(10)
合掌	20	10	17	37	18	11	5	21	139(36)
その他/不明	6/5	17/12	11/9	1/16	9/9	6/12	11/20	11/16	72(19)/99(26)
登梁状									
海老状	24	35	20	12	15	16	26	17	165(43)
合わせ梁	12	12	14	35	16	8	8	17	122(32)
その他/不明	7/1	3/4	1/7	7/9	1/8	4/10	4/13	7/11	34(9)/63(16)
建築年代									
最古例	1864年	17世紀末	1792年	19世紀初	18世紀末	1823年	1839年	18世紀末	
最新例	1946年	1945年	1945年	1943年	1945年	1945年	1945年	1945年	
19c前半以前	0	5	2	0	2	5	2	1	17(4)
19c後半～20c初	15	13	5	9	6	4	6	10	68(18)
20c前半	27	34	30	50	30	23	38	39	271(71)
不明	2	1	5	4	2	6	5	2	27(7)
史料 (件)									
台帳		4	3	1	1	2	3		
梁銘	14	12	7	12	6		5	8	
売買書		2							
その他	3	1	7	1		1		1	

1. 調査の概要

ゲアン省における伝統的民家に関する調査は、以下の3次にわたって実施された。それぞれの調査で対象となった民家の件数をゲアン省各県別に分けて示したのが、表1である。

1.1 ベトナム側調査（第一次／第二次調査）

ベトナム側調査チームは、ハノイ建設大学が中心となって、平野部に位置する八つの県において、1999年7月から10月にかけて第一次調査を実施した。その調査対象となったのは、385件であった。その概要を表2に示す。

第一次調査では、聞き取りと簡単な写真撮影が主に行なわれた。調査に際して、これまで通り、民家の屋根葺き材・

表1：ゲアン省民家調査 県別調査対象数

	第1次調査		第2次調査		第3次調査	
	調査棟数	(対象村数)	調査棟数	(対象村数)	調査棟数	(対象村数)
QuynhLuu県	44	(10/42)	4	(4/10)		
DoLuong県	54	(11/32)	10	(5/11)	10	(4/11)
DienChau県	42	(12/39)	3	(3/12)	3	(3/12)
YenThanh県	63	(12/33)	3	(3/12)	3	(3/12)
NghiLoc県	40	(10/38)	2	(2/10)	2	(2/10)
HungNguyen県	38	(06/24)	4	(3/06)	4	(2/06)
NamDan県	51	(12/24)	5	(4/12)	2	(2/12)
ThanhChuong県	53	(10/37)	6	(4/10)	7	(4/10)
QuyHop県(少数民族)	3	(2/03)				
合計	385	(83/269)	42	(30/86)	31	(20/73)

()内には調査対象となった村数/実際にある村数

規模・現存状態・建築年代・史料などについての情報と、家屋の外観、内部架構、家具配置などを撮影した4枚の写真とからなる調査票が作成された。このほかに今回は、特に日本側からの依頼に応じて、民家の配置・平面・断面などの簡略図も提供されている。調査対象が偏らないように、ひとつの県においておおむね40件ないし50件程度が目標とされ、結果的に最小でも38件、最大で63件、総計で385件の民家が調査された。調査された民家の数が比較的多かったのは山地に近い県で、一方、数が少なかったのは、国道1号線沿いないし海岸沿いの地域であった。

当該調査の結果から整理しうるゲアン省民家の建築的な概要については次節以降で後述するが、調査の対象となった伝統的民家の保存状況について、調査員の目視では385件中340例（86%）が良好の状態と判断された。今回のゲアン省における第一次調査では、残念ながら、どの調査員も漢字を判読することができず、年代に関する成果はほとんど挙げられなかった。そのため、第一次調査では、建設年代に関する情報は、家人からの聞き取りによるものがほとんどであった。

第二次調査においては、年代判定の資料の有無（台帳、梁銘など）、外観の形式や内部の架構形式、さらに地理的に偏らないことなどを基準として、第一次調査の対象民家からその一割程度を選定すべく、ベトナム側と日本側の双方による検討作業が進められた。結果的に、第一次調査対象385件の中から33例を選定し、1999年10月から12月にかけて、ベトナム側による第二次調査が実施された。また同時に、ゲアン省では追加的に少数民族の伝統的民家3件も併せて調査された。

第二次調査では、従前の書式に基づいて、詳細でより具体的な調査票が作成された。また、各部材の材質や改修した場所や時期などについての聞き取りに加え、配置、平面、断面、立面などの実測図が作成され、主屋の構造、彫刻、建具、ディテールなどの写真撮影が行われた。

1.2 日本側調査（第三次調査）

ベトナム側が中心となって実施した第一次および第二次調査の結果を踏まえて、日本側チームは調査対象を年代確定できるものを優先しながら、架構法および平面構成によって概略的な分類をしたうえで、地域的なバランスなどにも考慮し、典型的と思われる事例25例について独自の調査を2000年3月に行なった。

第三次調査は、第二次調査で作成された実測図の確認作業に加え、とくにベトナム側調査では判明・判読できなかった建物の建築年代に関する資料（妻板銘、梁銘などをはじめ、台帳、石碑、額銘など）の収集に努めた。また、柱などの痕跡のチェック、聞き取り調査、写真撮影も同時に行った。

第三次調査の概要を一覧化したものが表3である。

本報告は、ベトナム側が中心となって実施した第一次、第二次調査の結果を概観しながら、より具体的・詳細な分析や考察は、おもに第三次調査の結果に基づいている。

2. ゲアン省民家の概要

2.1 建築年代

前述したように、第一次調査では建築年代を示す銘文などからの情報は得られなかった。聞き取りなどの情報から判断すれば、総じて、19世紀中頃から20世紀前期にかけて建てられたものが多くみられた（89%）。それ以前にさかのぼることのできる民家は極めて少なく（4%）、残念ながら、ゲアン省では18世紀末から19世紀前期にかけて建てられたものもほとんど残存していない。

第三次調査では、25件中9例で建設年代をほぼ確定することができた（表3）。それらのうちで最も古い年代は1842年であった（No.88）。ゲアン省では通例、主室における左右の架構の小屋組に埋め込んだ板材に建設年代を書いている。こうした銘文の位置はバクニン省やナムディン省などの北部地域とは異なっている。また、家譜やその他の銘文など建設年代に関わる資料より年代確定できたものが5例あった。そのうち最も古いものは、1867年の建設とされる（No.279）。

小屋組内の板材に書かれた銘文や当該家系に保存されていた台帳などからわかる建設年代は、19世紀中頃（1842年／No.88）から20世紀前半（1945年／No.68）までの期間に属している。特に19世紀末（1883年／No.176）および20世紀前半（1911年～1945年）に集中している。

これら以外の民家は当主などからの聞き取りによって建築年代が推定された。それらの家屋は当該の家系がこの地に居住を開始した時期に、創建されたか、あるいは近隣から移築されたものがほとんどであった（No.28はフエからの移築）。

2.2 屋敷構え

ゲアン省の伝統的民家は、総じて家屋の規模に比して広い屋敷を有し、その周囲は低木の生け垣、あるいは簡素な煉瓦造の塀で囲まれている。敷地内には、主屋を中心に、付属屋、豚小屋、便所などがそれぞれ別棟で建てられているが、それら家屋は各戸で適宜配されているようであり、配置上、一定のルールは認められないようである。

民家における主屋は、第一次調査の結果から、一般に南および南東に向いてたつ（一次調査において385例中213例）。また、東向きは46例（12%）、南西向きは45例（11%）みられた。北あるいは西に面する民家も少数みられたが、聞き取りによれば、そうした事例の多くが何らかの理由で本来の向きを変えたものであった。主屋は平入りの一棟だけを建てるのが一般的であるが、2～3棟の家屋を軸線上に平行に配置するものも6例みられた（No.68、No.71など）。

それらはいずれも祖先を祀る祖祠堂を含むものであった。

2.3 主屋の平面

第一次調査の結果から、主屋の間口は5間以上の例と3間の例とがほぼ同じ比率で(40%)、調査対象事例の大半を占めている。しかし注目すべきは、間口4間の民家が63例(16%)みられたことである。これまでに調査を終えたベトナム各地において、主屋の間口は5間が最も一般的であり、小規模なもので間口3間、大規模なもので7間となり、いずれも奇数間の間口であった。これに対して、ゲアン省では建物間口4間ないし6間という偶数間の家屋が分布している。

主屋の内部は、板壁で3室ほどに間仕切られ、その平面構成は左右対称としない例が多い(第三次調査より、間口3間の家屋を除いた18例中で14例)。通常、主屋正面にむかって間口左側3間は祭壇や接客間などの外向きの空間 Nhà ngoài (以降、「外の間」と称する)として用いる。その右側の柱間正面1間には開口部を設けず、貴重品などを収納するための倉庫、または若夫婦のための個室、あるいは祭壇を配した空間ともなる。このような空間はこれまでのところ他の省ではまったくみられず、現地では Gian bảy 「七尺の間」と呼ばれている。主屋正面右側の間口1間ないし3間は日常的生活の空間であり、主婦や子供たちの空間で、Nhà trong 「内の間」と呼ばれる。間口3間の「外の間」のうち、その中央間は一般に Gian sáu (六尺の間)と呼ばれ、Gian năm 「五尺の間」と呼ばれている左右の柱間よりやや広い。また、「内の間」におけるすべて柱間は Gian năm 「五尺の間」と呼ばれている。「外の間」と「内の間」との中間に、主屋のなかで最も広い柱間間隔と

なる「七尺の間」が1間のみ設けられる。こうした呼称は柱間間隔に直接関連したものと考えられる。また、こうした平面構成をとれば、間口6間の家屋となる。一方、上述したように、これまでの調査で一般的であった間口3間ないし5間の民家もみられ(No.302やNo.133など)、間口7間とする大規模な民家も第三次調査で1例みられた(No.238)。

2.4 主屋の構造と立面

第一次調査の結果を集計してみると、ゲアン省における伝統的民家は瓦葺き切妻造が一般的であるといえる。一部、とくにĐô Lương県およびThanh Chuông県では、入母屋造の民家が多くみられる地域もある(Đô Lương県54件中43例、Thanh Chuông県52件中45例)。屋根は、他の地方と比べて、かなり急な7/10以上の勾配で、草葺きなどの屋根を連想させる。家屋内の床はたたき土間が多い。モルタルや磚敷などの床もみられたが、その多くは後補であった。

第一次調査において作成された断面略図によれば、主屋の奥行は最大でも柱間4間で、柱間1間から3間とするのが一般的である。また、主屋正面の軒先は比較的深くとられているが、その前面に柱が独立して立つ吹き放ちの柱廊はあまり一般的ではない。第三次調査対象全25例中、吹き放ち柱廊を有するものは4例であった(No.363、No.276、No.128、No.115/No.231のヒエン柱は後補)。

架構の型式についてみると、前方または後方のどちらか一方の正柱を減柱するのが最も多い(第一次調査対象事例385件中247例、64%)。一方、正柱を2本とも立てるものは28例(7%)、中央の柱1本で棟木のやや下まで支持する

表3: ゲアン省伝統的民家に関する第三次調査 調査対象一覧

No	所在地 県	建築年代 (機軸)	屋根			主屋の平面				主屋の架構				備考			
			形式	勾配	材料	向き	形式	間口 (mm) × 奥行 (mm)	礎石/?	床	形式	登梁状	小屋組		母屋	主な材質	
302	Nam Đàn	1862(妻板銘)	入母	7.86	瓦	北西	3+0+0	3(09 170) × 4(6 570)	有/不	セメント	III(1)	海老状	B(東)	角	lum		
329	Nam Đàn	1936(妻板銘)	切妻	7.88	瓦	東	3+1+2	6(12 105) × 3(5 940)	有/○	土間	III(2)	海老状	板状	角	lum		
141	Yên Thành	19c末(開取り)	切妻	8.40	瓦	南	3+1+0	6(08 630) × 4(4 965)	有/×	土間	中柱	合わせ梁	合掌	角	lát hoa		
176	Yên Thành	1883(家譜)	切妻	8.40	瓦	東南	3+0+0	3(07 440) × 3(5 110)	有/×	磚敷	V	海老状	A	角	lum	もと6間屋	
203	Yên Thành	?	切妻	8.53	瓦	?	3+0+0	3(06 770) × 3(3 940)	有/不	セメント	V	海老状	A	角	?	前屋付加	
231	Nghị Lộc	19c末(開取り)	切妻	5.60	瓦	東	3+1+1	5(13 040) × 3(7 605)	有/×	セメント	III(1)	海老状	特殊	角	lum	板壁良い状態残存	
238	Nghị Lộc	19c末(開取り)	入母	5.46	瓦	南東	3+1+3	6(10 065) × 3(4 070)	有/○	土間	II/III(1)	合わせ梁	合掌	角	lum	基礎高上げ(1982)	
60	Đô Lương	19c末(開取り)	入母	8.80	瓦	東北	3+1+2	6(13 360) × 4(4 580)	有/○	土間	III(1)	海老状	A	角	lum, táu, kén kén	かつて背後に祠堂	
68	-1	Đô Lương*	1945(妻板銘)	入母	7.10	瓦	東南	3+1+1	5(13 840) × 3(6 165)	有/○	セメント	III(1)	海老状	A	角	lum, mít	
-2	-	-	入母	8.30	瓦	東南	3+0+0	3(07 700) × 3(4 360)	有/×	セメント	III(1)	海老状	A	角	mít, xoan, dổi	礼堂/移築(1989)	
-3	-	-	入母	9.58	瓦	東南	3+0+0	3(08 775) × 3(5 415)	有/×	セメント	III(1)	海老状	A	角	mít, lum, xàng lè	祠堂	
71	-1	Đô Lương*	1877(家譜)	切妻	7.20	瓦	南西	3+1+(1)	4(11 695) × 3(6 120)	有/×	磚敷	III(1)	海老状	板状	角	mít, lum	移築/元7間屋
-2	-	-	1902(妻板銘)	切妻	7.31	瓦	南西	3+0+0	3(?????) × 1(3.500)	有/×	磚敷	V	特集	B(東)	角	lum, dổi, mít	礼堂
72	-1	Đô Lương*	1877(妻板銘)	入母	8.50	瓦	南	3+1+1	5(13 770) × 4(4 920)	有/×	セメント	III(1)	海老状	B(東)	角	lum, mít, xàng lè	前屋兼ねる生活空間
-2	-	-	入母	7.93	瓦	南	3+0+0	3(07 475) × 3(5 185)	有/×	磚敷	III(1)	海老状	A	角	mít, lum	祠堂	
88	Đô Lương	1842(妻板銘)	切妻	7.70	瓦	南	3+0+0	3(09 740) × 3(6 250)	有/不	不明	III(2)?	海老状	板状	角	mít, lum, dổi		
94	Đô Lương	1911(棟木銘)	切妻	7.61	瓦	東南	3+0+0	3(06 300) × 3(4 500)	有/×	不明	中柱	合わせ梁	合掌	角	lum, dổi, vàng tâm		
276	-1	Hùng Nguyễn	1625(開取り)	入母	7.88	瓦	東	3+0+0	3(08 450) × 4(7 300)	有/○	セメント	III(2)	海老状	B(東)	角	lum	祠堂
-2	-	Hùng Nguyễn*	1946(移築)	入母	8.30	瓦	南	1+1+2	4(08 467) × 3(4 850)	有/○	土間	III(1)	板状	板状	角		移築(1946)
279	Hùng Nguyễn	1867(扉書)	入母	10.10	瓦	東	3+1+1	3(10 900) × 4(4 220)	有/○	土間	III(1)	海老状	A	角	lum, xàng lè	阮族祠堂記	
270	Hùng Nguyễn	1924(妻板銘)	切妻	8.10	瓦	南西	2+1+2	5(11 140) × 4(5 840)	有/○	土間	II	合わせ梁	合掌	角	lum, trường, dổi	移築(1916)	
115	Diễn Châu	1933(妻板銘)	切妻	7.30	瓦	北	3+1+2	5(10 985) × 4(4 810)	有/×	不明	V	合わせ梁	合掌	角	lum, dổi	1933完成の銘	
128	Diễn Châu	1870(開取り)	入母	7.10	瓦	南	3+1+1	7(15 370) × 5(5 700)	有/×	土間	V	合わせ梁	合掌	角	lum, mít, cá, dinh hương	ヒエン/もと草葺?	
133	Diễn Châu	19c末(開取り)	切妻	6.40	瓦	西	1+3+1*	5(14 015) × 3(7 640)	有/×	磚敷	III(2)	海老状	B(東)	角	lum	初代科挙合格/ヒエン、フエから移築	
363	Thanh Chương	19c末(開取り)	切妻	9.30	瓦	南東	3+1+1	5(12 805) × 5(5 800)	有/×	不明	III(1)	海老状	板状	角		周囲板壁良い状態残存	
382	Thanh Chương	1890(開取り)	入母	8.29	瓦	南東	2+1+2	5(12 200) × 3(6 300)	有/○	土間	III(1)	合わせ梁	合掌	角	lum, mít	かつて棟木銘	
384	Thanh Chương	1942(開取り)	切妻	5.37	瓦	南	2+1+2	5(12 740) × 3(6 580)	有/○	土間	ゲアン	合わせ梁	合掌	角	dầu, lum	ゲアン省しかない架構	
344	-1	Thanh Chương	18世紀末(家譜)	入母	7.40	瓦	南	3+1+2	7(13 490) × 2(5 060)	有/×	土間	中柱	合わせ梁	合掌	角		側面にヒエン
-2	-	-	入母	8.60	瓦	南	3+0+0	3(05 570) × 3(3 830)	有/○	土間	III(1)	合わせ梁	合掌	角		祠堂	
346	-1	Thanh Chương	100年(開取り)	切妻	7.95	瓦	西	3+1+1	5(13.150) × 4(5 170)	有/×	土間	III(1)	合わせ梁	合掌/東	角		屋敷内に池
-2	-	-	入母	7.62	瓦	西	3+0+0	3(08 180) × 3(5 750)	有/×	不明	III(1)	海老状	A	角		祠堂	

ものは36例（9％）みられた。また、奥行方向に2本の柱を立て、それらを連結する横架材がさらに前後の斜梁と交差する位置までのびる型式もみられた（31例8％）。このような架構法は、これまでのところゲアン省以外ではみられない。斜梁に着目すると、北部のバクニン省やナムディン省などと共通する大きく湾曲した海老状の斜梁や、竹組みに通じると想像される柱の頂部を挟んだ合せ梁のものが存在する。両者の斜梁は第一次調査の結果では、ほぼ同じ比率でみられた（表2）。小屋組では前後の斜梁によって合掌を組むものが最も多く（139例36％）、斗を介して横材を一段配するものが32例（8％）、東・挿肘木からなるものが38例（10％）みられた。ほかに、板状のものや束を用いるもの、アーチ状の板材とするもの、さらにはアーチ状部材に束を併用するものなど様々な形状・形態の小屋組がみられた。架構に用いられる各部材は、彫刻などをほとんど伴わない素朴なものがほとんどである。また、一部に天井が張られている民家もみられた（第三次調査において5例）。

主屋前面には木製建具が備わるが、通常、それら建具は床より高さ30cm以上の中敷居の上にはめ込まれた枠内に納められている。開口部の建具は開き扉がほとんどであるが、中敷居の上面に横溝を掘った引き込み戸もみられる。また、主屋正面のすべての柱間に出入り口の扉が設けられることはあまりなく、一部に板壁を設け、さらに小さな窓を開ける例がよくみられる。正面に窓開口をもつ柱間は、通常「七尺の間」が「六尺の間」である。平面の構成ばかりでなく、正面ファサードにおいても非対称性がみられる。主屋の背面および側面では、架構を支える柱からやや離れた位置に、現状では煉瓦壁が設けられている例が多い。しかし、No.238やNo.346などで家屋周囲に板壁が残存している例もみられ、またNo.363では、柱にのこる痕跡から、当初板壁が設けられていたものと復元できる。このような板壁は Ván Thùng と呼ばれる。

2.5 建築用材

ゲアン省の伝統的民家に用いられている木材は、多種におよぶ。その多くはLim材ないしMít材であるが、ほかにXoan材、Dổi材、Kên Kên材、Đình hưởng材なども使用されている。すなわち、ベトナム北部地方において一般的なLim材やXoan材のほか、中部と南部でしばしば用いられるKên Kên材やĐình hưởng材などもゲアン省では広く使われている。

3. 典型的な実例

Phạm Đình Tân宅

(No.238／所在地：Nghị Lộc県 Nghi An村／図1)

当家の建設年代は、聞き取りなどにより、19世紀末頃に建設されたと推測される。現在の当主は5代目で69歳であ

る。1849年に生まれた当家初代が、40歳の頃、当該家屋を建設したと伝えられている。広い面積を有する屋敷のなかに、主屋、付属屋、台所、豚小屋が配されている。隣接する民家とは低い植物による生け垣で、かなり曖昧に区画されているだけである。門はないが、主なる入り口は主屋の正面、中心軸上に位置する。主屋は干し庭に面して東南に向き、主屋右側に別棟の付属屋が隣接する。台所と豚小屋もそれぞれの別棟で、主屋・付属屋とは離れた位置に適宜、配されている。

低い土壇の上に立つ主屋は、洋瓦で葺かれた5.4／10勾配の切妻造屋根で覆われている。建物規模は、間口6間・奥行4間である。奥行方向では2本の正柱列間の柱間が1,460mmと広く、その前後の側柱列との柱間が960～975mm、建物の前面には独立して立つ柱列はなく、後側柱から610



写真1：Phạm Đình Tân宅／外観

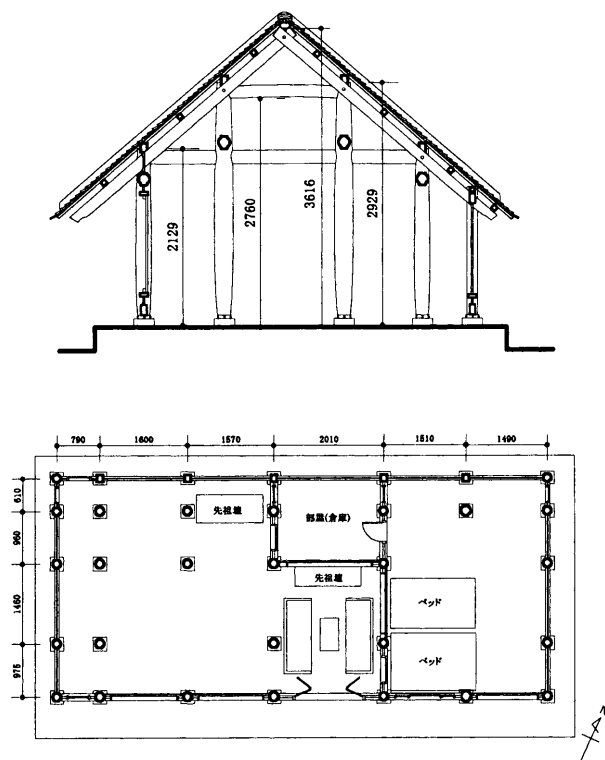


図1：Phạm Đình Tân宅／断面図・平面図

mmの位置に角柱が立つ。建物の側面と背面には柱列の位置に板壁が設けられている。この板壁は幅300mmほどの縦板羽目で、土間床から高さ約400mmの中敷居の上にある。

建物の間口方向では、正面左端の柱間が790mmで、建物のほぼ中央、左から4間目の柱間が最も広い2,010mmで、ほかの4間はおおよそ1,500mmである。屋内は間仕切り壁によって、正面左側の間口4間分がいわゆる「外の間」、右側間口2間分が「内の間」となる非対称な平面構成である。「外の間」の最も右側の柱間、つまり最も広い柱間の奥、2間分は板壁で仕切られた閉鎖的な個室となっている。ここには「外の間」側からはアクセスできず、「内の間」側に幅580mmの出入り口が1箇所だけ設けられている。この空間はBuông「部屋」と呼ばれるが、普段の生活のために使われることはなく、現状では貴重品などを収納する物置空間となっている。その部屋の前方に先祖壇が祀られ、さらにその前に接客用のイス・テーブルが置かれている。また、その左側の柱間の奥にも現在、祭壇が置かれている。聞き取りによると、この「部屋」は1951年に改装されたもので、当初は当該の柱間の全奥行を占めていたという。「外の間」における正面間口3間には、土間上約400mmの高さに中敷居を設け、その上に内開きの框観音扉が備わる。「内の間」には縁台やベッドが置かれ、内向きの接客用、あるいは主人の居間として使われている。「内の間」の正面向かって右側の柱間には扉口が設けられているが、左側には約500mm×500mmの小窓が備わり、そのすぐ内側には縁台・ベッドが置かれている。

柱は、土間の基壇上に据えられた礎石の上に、十字形をした木製の部材を介して、その上に立つ。主屋の奥行方向の架構をみると、中央に立つ2本の直径約160mmの柱（「正柱」）は、その頂部を小屋梁で結び、そのより約500mm下を横架材で連結されている。この部材は、同じ高さで前後の柱（「側柱」）の頂部までのびている。さらに直線的な2枚の板状部材からなる合せ梁がこれら各柱の上端部を斜めに連結し、軒先まで達している。この斜梁は柱と留め栓で緊結させている。「外の間」においては前方の正柱が、「内の間」では正柱が2本とも減柱されている。桁行方向では、正柱も側柱も、柱上方を連結する横架材が1本渡されるだけである。

前方の側柱列に建具が備わり、その前方には独立して立つ柱列はない。後方側柱の背後にもう1本細い柱が立てられ、そこに板壁が嵌め込まれている。各柱の直上および柱と柱の中間に、それぞれ1本ずつ母屋材が配されている。母屋材の上には約60mm×60mmの垂木が400mmほどの等間隔で配され、さらに桁行方向に割れた竹を敷いて、その上に直接瓦が葺かれている。

Nguyễn Cảnh Cỏ宅

(No.344／所在地:Thanh Chuông県 Thanh Vân村／図2)

聞き取りによると、現在68歳である当主は数えて18代目にあたり、当該家屋は18世紀末のものであると伝えられるが、所見の限りでは、現存遺構がそれほど遡れるとは思われない。

150mmほどの低い基壇上に立つ主屋は、7.4/10勾配の瓦葺き入母屋造の屋根で覆われている。間口6間・奥行2間の主屋は、正面向かって左側の3間分を「外の間」とし、その右側の1間分は最も広い柱間間隔（2,730mm）をとる「七尺の間」で、残りの2間分を「内の間」としている。「外の間」は柱間ごとに3間とも、その奥に祭壇や先祖壇が配され、右側前方に縁台が置かれている。「七尺の間」では、前方にベッドを置き、「内の間」と繋がっているが、後方は板壁で囲んで「部屋」となっている。「部屋」はその右側、「内の間」寄りの壁に狭い扉口を設けている。現在、その内部は物置として使用している。聞き取りによると、この「部屋」はかつて若い夫婦のための個室として用い、その前方の空間は最も高齢な家人の寝所として使用されていたという。現在、「内の間」は左側奥にベッドを置き、右側前方部分に接客用のイス・テーブルなどが配置されている。「外の間」正面の開口部は左右に引き込む形式の建具であるが、「内の間」では内開きの板戸となっている。

「内の間」の正面右側の柱間、つまり当該家屋の右端の柱間は、1,000mmほどと他の柱間の半分ほどで、しかも柱自体も細く、後方では柱列もずれている。その右側約400mm離れて、煉瓦壁が立つ。この煉瓦壁は家屋背面、後方柱列から約900mm離れた位置に設けられている。一方、家屋の左側面をみると、「外の間」間口3間分を画して、3本の柱が立ち、その位置に伝統的な板壁が現存している。その外側900mmには、細い独立柱が2本立ち、入母屋屋根を支えている。すなわち、当該家屋は正面向かって左側面、「外の間」側がおそらく当初の姿を伝えるもので、右側面、「内の間」側は改装されたものと推測される。

「外の間」の背後、中心軸をそろえて、別棟で間口3間・奥行2間のNhà thờ tổ「祠堂」がある。この建物は「外の間」から2,400mmほど離れ、小さな中庭状の空間を介して、より高い基壇の上に建てられている。その中央柱間は2,170mmであるが、左右柱間は極端に狭く870mmしかない。建物の側面と背面は、柱列より610～650mm離れて煉瓦壁が囲んでいる。正面3間ともに内開き扉の建具が備わる。中央柱間の奥に土間から約1mの高さに床を設け、四面とも板壁で囲んだ閉鎖的な箱状の空間が作り出されている。その前方および左右に祭壇が配される。

主屋における奥行方向の架構をみると、「外の間」の両端および「内の間」では、棟木直下に柱が立つ、いわゆる「中柱」形式である。中柱と両側柱の3本の柱は、側柱の上部の位置にわたる水平横架材と、棟木から軒先まで一材

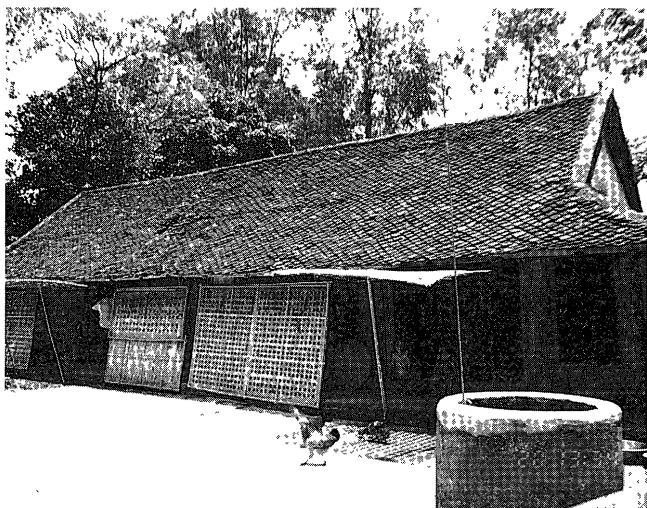


写真 2 : Nguyễn Cảnh Cỏ宅／概観



写真 3 : Nguyễn Cảnh Cỏ宅／室内における架構

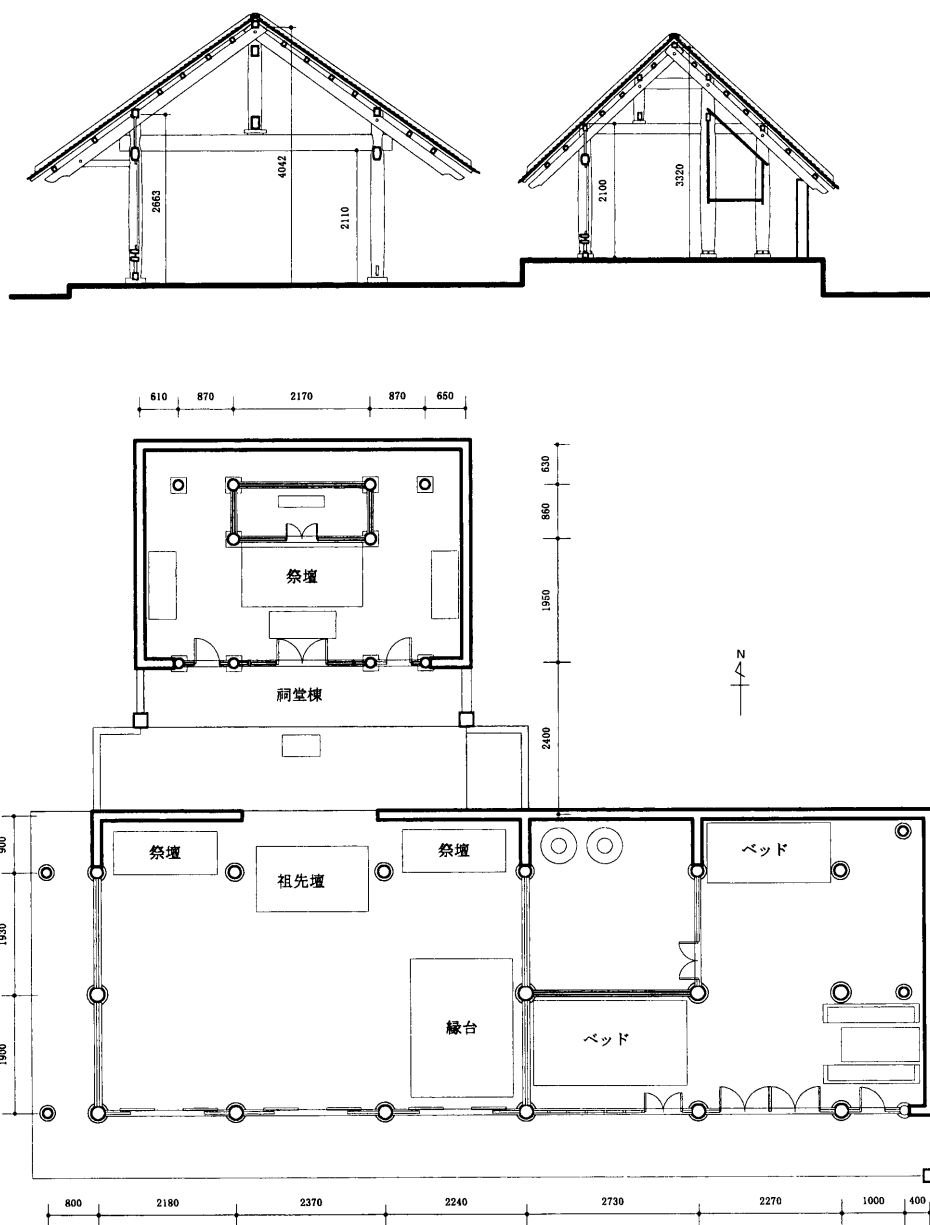


図 2 : Nguyễn Cảnh Cỏ宅／断面図・平面図

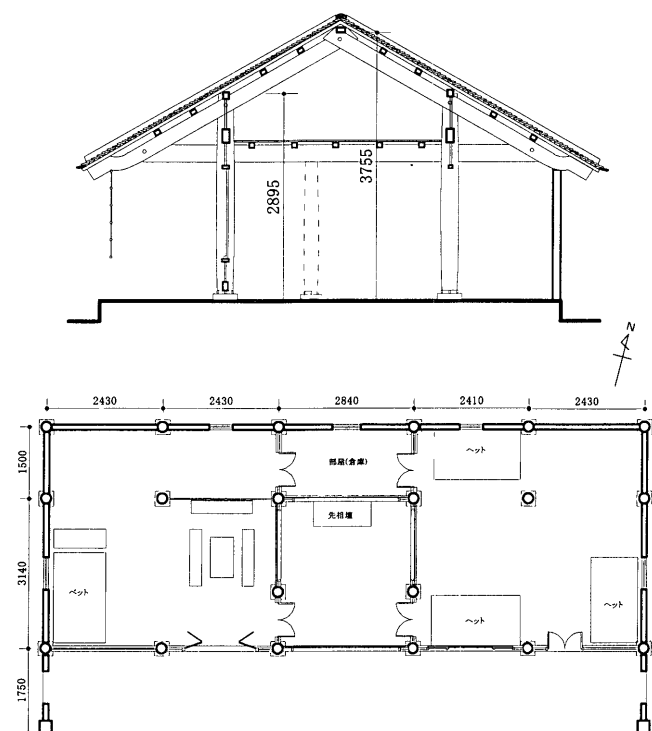


図 3 : Nguyễn Hữu Chinh 宅／断面図・平面図

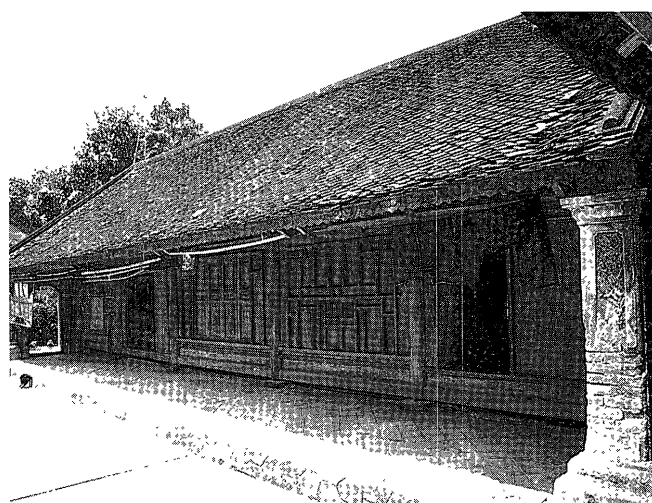


写真 4 : Nguyễn Hữu Chinh 宅／概観

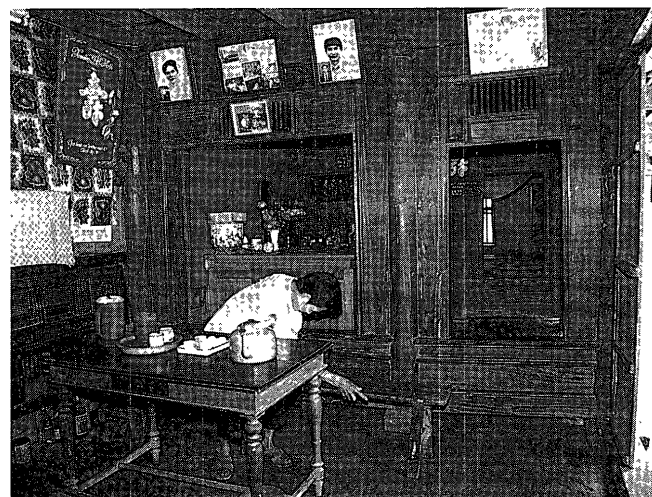


写真 5 : Nguyễn Hữu Chinh 宅／架構

の2枚の板を合わせた斜梁で固定されている。一方、「外の間」内部の2つの架構においては、中央の柱は、前後2本の側柱上部を水平に渡された横架材の上に立つ束となっている。その束は斗状の部材を介して立ち、合掌部分まで達している。斗状部材の直上および合掌部分直下の二箇所を桁行方向に貫状の部材が渡され、各架構を連結している。側柱は上部一箇所だけ、横材でつながれている。これら水平の横架材や斜めの合せ梁は、柱などと留め栓によって緊結され、すべて直線的な部材で、ほとんど装飾的な要素を有しない。ただ、軒先深く伸びた斜梁の先端部にはわずかな繰り形がみられるのみである。また、斜梁は前面の軒先部分だけ水平な腕木で側柱と連結されている。

一方、主屋「外の間」の背後、中心軸をそろえて別棟で配されたNhà thờ tổ「祠堂」は、間口3間・奥行2間で、そのなかの架構をみると、その両端部では2本の側柱をわたる水平な横架材とその上にたつ束からなる簡素な形式である。中央二つの架構では、奥行4間とみなすと、前方の正柱1本が減柱された形式である。主屋と同様、棟木から軒先まで一材の直線的な合せ梁が、柱や束の頂部を結んでいる。

Nguyễn Hữu Chinh 宅

(No.384／所在地：Thanh Chương 県 Thanh Giang 村／図3)

当該家屋は現在75歳の当主により1940年に建てられたものである。建築年代としては古いものではないが、平面や架構の構成や形式において、ゲアン省で最も特徴的な実例のひとつといえる。主屋と付属屋は同一基壇上にL字形をなして立ち、その前に干し庭が配されている。また、台所や家畜小屋などは敷地内に点在して配置されている。

主屋は、間口5間・奥行2間の規模で、前面に柱列をもたない深い軒がのびる。5.3/10勾配の瓦葺き切妻造の屋根がかかる。間口5間のうち、中央の柱間間隔が2,840mmと最も広い「七尺の間」である。また、そのほかの柱間は2,400mmの程度で、正面向かって左側2間が「外の間」、右側2間が「内の間」であり、「七尺の間」を中心としてほぼ左右対称の平面構成となっている。それぞれの空間は板壁で間仕切られている。「七尺の間」は前方2間と奥に1間のふた間に分割されている。それぞれの部屋はともに「外の間」と「内の間」のそれぞれからアクセスできるように扉口が設けられている。ただ、聞き取りによると、普段の生活のなかでは、それらの扉口はあまり用いられないようである。現在、「七尺の間」の前方空間には仏壇や先祖壇が配置され、後方は物置空間として使われている。また、「外の間」には接客のためのテーブルやイス、主人の寝台などが配置される。「内の間」にはベッドのみが配され、寝室として用いられている。現状においては、家族の日常生活はほとんど付属屋で行われているという。

主屋の前面は、前述のように柱のない、奥行1,750mmあ

まりの深い軒下空間となっている。建物の左右両端に軒先を支持する煉瓦壁が突出し、そこに庭や付属屋への出入口が設けられている。家屋の側面および背面は柱筋に煉瓦壁が設けられている。正面の木製建具は、他の事例と同様に、土間上約400mmの高さに設けられた中敷居の上に備わる。ただし、「外の間」の開口部分の1間のみ、敷居の高さが150mmほどになっている。「七尺の間」および「内の間」では内開き框戸を用い、「外の間」では板折れ戸を用いている。

柱は、礎石の上に置かれた十字形の部材を介して、その上に立つ。「外の間」および「内の間」ともに、間仕切り壁の設けられていない柱筋に架かる奥行方向の架構は、前後3本の柱で支持されている。柱間隔3,140mmに配された2本の柱は、まず、その上方部分で水平横架材（背230mm・幅180mm）で連結されている。さらに棟木から斜めに直線的にのびる合せ梁によって、それらの柱の柱頭部分が緊結されている。これらの2つの部材、すなわち斜梁と横架材は、それぞれの柱の前方約1,300mmの位置で丸い木製の留め栓によって接合されている。建物後方では、これらの接合点の先に第三番目の柱が建てられ、煉瓦壁が設けられている。前述の2本の柱の間にかかる水平横架材の上には、幅90mm・高さ70mmの根太が400mmほどの等間隔で配され、その上に板が張られている。聞き取りによると、この天井板は洪水の際などに避難用に使われるという。この天井板のやや上の位置に、桁行方向に水平横架材（背220mm・幅150mm）が渡され、各架構が連結されている。合せ梁の上には、幅60mm・背60mmの角状の母屋材が600mmほどの荒い間隔で載せられ、その上に幅70mmの薄い垂木板が約70mmの間隔で敷かれている。垂木の上面はキザギザに仕上げられ、瓦Ngói móc（「かける瓦」の意）が引っ掛けるように葺かれている。

板壁で間仕切られた柱筋に架かる架構をみると、前方の柱に寄った位置にもう1本の柱が立てられている。この柱は水平横架材の下面までで、斜梁までは達していない。この柱はおそらく扉口を設けるために設けられた方立のようなものであろうと考えられる。

Ngô Thế Phiệt宅

(No.115／所在地：Diên Nguyên県 Tân Thịnh村／図4)

当該家屋の小屋組内にある板状部材に、「皇朝啓定丁巳起造／保大癸酉完成」という銘文があり、これにより当家は1917年に着工し、1933年に竣工したと考えられる。

現在、主屋は付属屋および台所とT字形をなして配されている。150mmほどの基壇の上に立つ主屋は、7.3/10勾配の瓦葺切妻造で覆われ、間口6間で狭い柱間ながら奥行5間の規模を有する。平面構成は、正面向かって左側間口3間分を「外の間」、その右側間口1間分を「七尺の間」、側間口2間分を「内の間」とする。「外の間」における間口

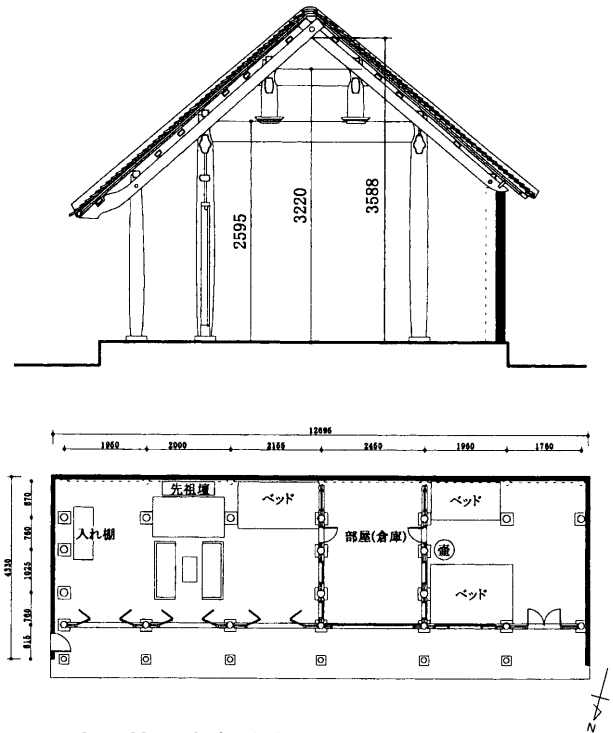


図4：Ngô Thế Phiệt宅／断面図・平面図

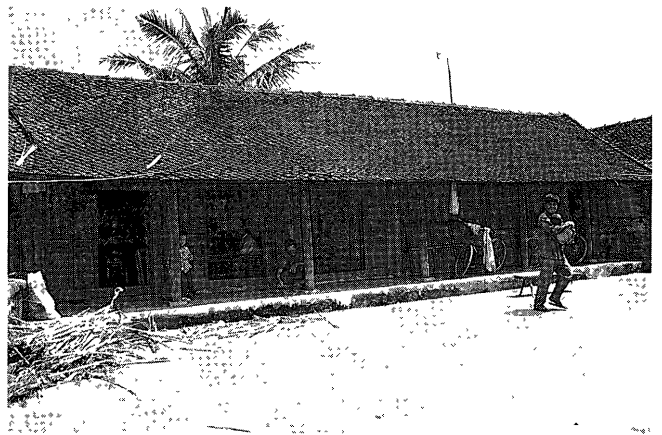


写真6：Ngô Thế Phiệt宅／正面



写真7：Ngô Thế Phiệt宅／室内における架構

方向の柱間は2,000mm程度で、「七尺の間」では2,450mmと最も広く、「内の間」では2,000mm以下である。それぞれの空間は板壁で間仕切られ、建物の正面には独立の柱列のたつ吹き放ち柱廊が設けられ、それぞれの柱間には木製の建具が備わる。建物の側面および背面は煉瓦壁によって囲まれている。現在、建物正面向かって右側側面の煉瓦壁は、隣接する付属屋の壁をも兼ねる。また、建物背面の壁沿いには柱は残っていないが、現存遺構にのこる痕跡および聞き取りから、当初、現状の煉瓦壁のすぐ内側に柱列があり、建物の側面および背面は柱筋において板壁がはめ込まれていたものと推測される。

「外の間」間口3面のうち中央の柱間には、先祖壇が安置され、その前面は接客空間として用いられている。右側の柱間にはベッドが置かれ、76歳の当主の寝所となる。「七尺の間」では、No.384などとは異なり、内部に間仕切りがなく、現在、当家では倉庫として使用している。建物の正面側には出入り口はなく、奥寄りの柱間に設けられた扉口から「外の間」「内の間」それぞれにアクセスできる。「内の間」には2基のベッドを配し、家族の寝室となっている。建物正面の木製建具は、土間から高さ約120mmに設けられた敷居の上に備わる。「外の間」は正面3間ともに折れ戸観音扉で、「内の間」では正面左側1間は格子窓とし、右側に内開き戸を備えている。

奥行方向の柱間は、前述のように、それぞれかなり狭くなっているが、室内の間仕切り壁が設けられている柱筋の架構を基本とすれば、建物の奥行は5間とみなせる（建物背面にも柱列があったものとする）。そこで「外の間」における中央二組の架構をみると、中央2本の本来「正柱」となるべき柱がともに省略され、その前後の「側柱」の上端部に「大梁」が架け渡されている。この梁の上に斗状の部材を介して、本来の正柱は2本の束となり、さらにそれらの上端部を結んで、もう一段、小梁が渡されている。これらの側柱および束はそれぞれ、その頂部において母屋材兼ねる頭貫のほかにもう1本の部材が桁行方向に架かり、棟から直線的にのびる2枚の板を合せた斜梁が、それらの上にそれぞれの柱・束の上端部を挟み合わせるように載る。この合せ梁は棟木から軒先まで一材でのびている。正面側ではヒエン柱の頂部と結合され、その先端部では簡単な繰り形がみられる。また背面側では、現在は、煉瓦壁の中に直接挿入されている。合せ梁と柱・束との接合部には丸い木材でできた留め栓が用いられている。斜梁の上には角材の母屋材を配置し、その上に垂木、瓦を順次載せる。柱や束の直上に配された母屋材とその下方の頭貫に相当する横架材との間には、浅い線刻が施された板が嵌め込まれている。また、「外の間」の側柱をわたる大梁や束を繋ぐ小梁、さらには合せ梁などの先端にも、葉状模様が彫刻される。次に、「内の間」にかかる架構をみると、「外の間」にかかる架構と同様であるが、横架材の先端部にも全く彫

刻はみられない。

Nguyễn Văn Lãng家住宅

(No.363／所在地:Thanh Chuông県 Phong Thịnh村／図5)

当該家屋の建設年代は不明であるが、聞き取りにより、19世紀末頃に大規模な修理を受けたと推定される。現在の当主は67歳で5代目であり、2世代前の3代目の先祖により大修理されたという伝承がのこる。

広い茶畑の中に当家屋敷はある。当家の主屋は、その左側にL字形をなして配された付属屋とともに、干し庭を囲んでいる。聞き取りによると、当初、主屋の右側にも付属屋が配されていたが、1956年に除却されたという。台所は

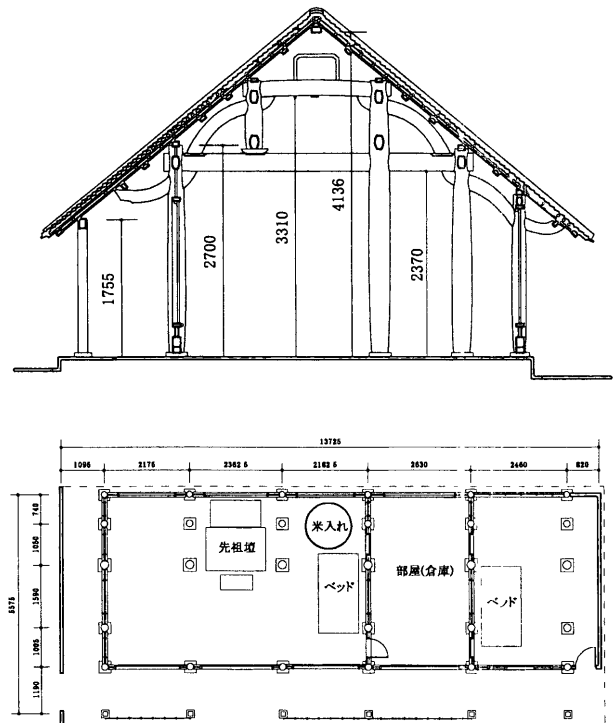


図5：Nguyễn Văn Lãng宅／断面図・平面図

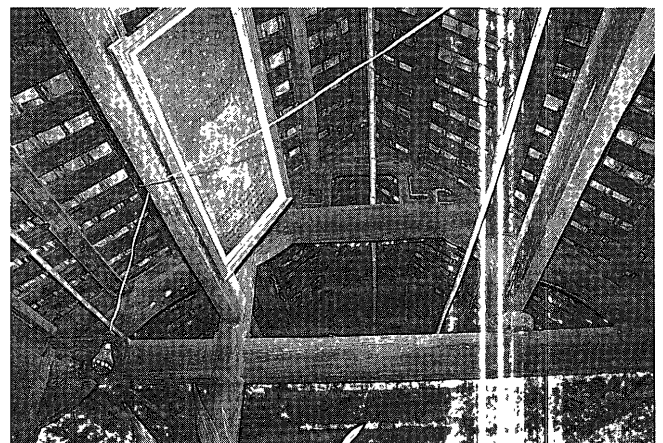


写真8：Nguyễn Văn Lãng宅／内部における架構

これらとは別棟で、現付属屋に隣接している。

当家主屋は、100mmほどのかなり低い基壇の上に立ち、正面には吹き放ち柱廊を備え、9.3/10勾配の瓦葺き切妻造の屋根で覆われている。間口は5間ほどで、家屋正面向かって左側間口3間分を「外の間」、その右側間口1間分を「七尺の間」、建物右側間口1間あまりを「内の間」とする平面構成である。「外の間」における桁行方向の柱間は、3間のうち中央の柱間は広く（2,363mm）、左右の柱間は2,200mm程度である。「七尺の間」の柱間は2,630mmと最も広く、「内の間」の柱間は2,460mmである。なお、現在、家屋右端部分、柱列から820mmに煉瓦壁が設けられ、「内の間」が広げられている。家屋の左側側面および背面では、柱筋において伝統的な板壁が現存している。また、家屋の左側面には、柱筋から1,095mm離れた位置に煉瓦壁が設けられ、付属屋と裏側の庭に通じる通廊となっている。

「外の間」における中央の柱間には先祖壇が安置され、その右側の柱間にはベッドや竹で作られた米穀入れの箱が置かれている。「七尺の間」は間仕切られておらず、「外の間」と扉口が正面寄りに1箇所だけ設けられている。現在、ここは倉庫として用いられている。「内の間」にはベッドのみが配され、寝室となっている。家人は現在、「外の間」はおもに「祠堂」として使い、「七尺の間」を含めて「内の間」を日常生活のためと考えているようである。また、「七尺の間」は当初、若夫婦の部屋であったが、後に家族の中で亡くなったばかり故人を弔う行事などがここで執り行われたという。

奥行方向の柱間は5間で、うち中央の正柱間が1,590mm、その左右の柱間が1,000mmあまり、前方のヒエン柱までが1,190mm、後方の柱間が740mmである。「外の間」内の中央部分にかかる2組の架構についてみると、2本あるべき正柱のうち前方1本が減柱され、その代わりに両側柱の上部の位置に架け渡された横架材の上に束が立つ。つまり、この横架材は後方の正柱と前方の側柱、さらに後方の正柱と後方の側柱とを同一の高さで連結し、その上に湾曲した海老状斜梁が束の上方からのびている。さらに前方では、斜梁は側柱からヒエンの中ほどの軒裏でとまり、ヒエン柱とは連結されていない。つまり、この柱は全体架構とは独立的に立っている。一方、後方では、側柱から建物最奥の柱列を経て外部軒裏までのびている。束と後方の正柱の頂部は小屋梁で結ばれ、その上は三角形の板状部材で埋められている。角材の母屋材は、斜梁の湾曲した隙間を埋める幕板上に配され、その上に薄板の垂木が敷かれている。さらに間口方向には小さな竹組が載せられ、その上に敷き瓦が葺かれ、仕上げに魚鱗状に瓦が葺かれる（Ngói Vảy Cá）。すべての柱および束の上部には、桁行方向に頭貫に相当する横架材が渡され、正柱および束にはさらにその下方にもう1本別の横架材がかけられ、各架構を連結している。

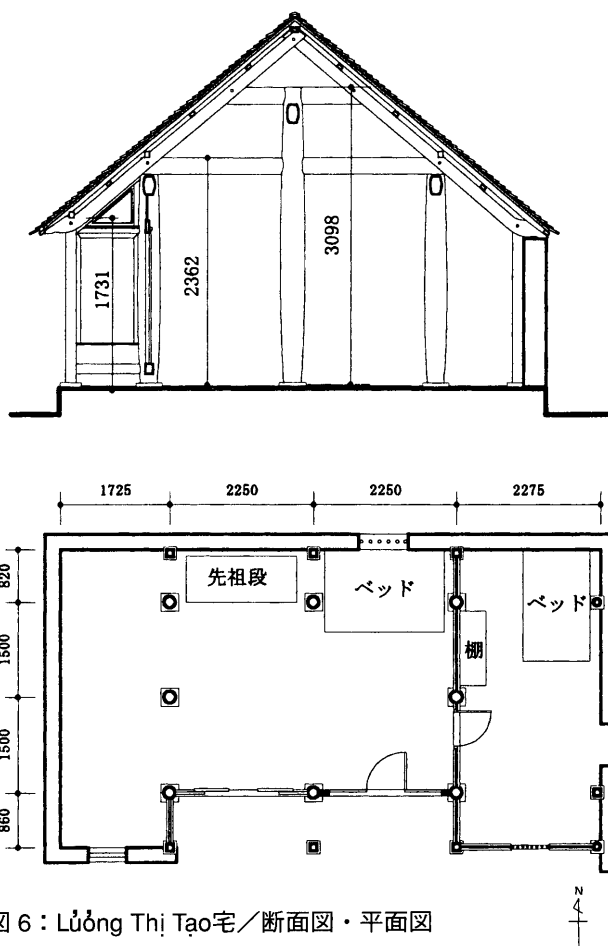
Lưỡng Thị Tạo宅

(No.141／所在地：Yên Thành県Mã Thành村／図6)

当家主屋は、建設年代も不明なうえ、大きな改変を受けているが、内部に残る架構は当初のものと推定され、その形式が貴重であると判断したので、ここに取り上げたいと思う。



写真9：Lưỡng Thị Tạo宅／室内における架構



現在、主屋は間口4間・奥行4間である。平面については、当初の姿から著しく変わってしまっているため、ここでは架構についてのみ述べることにする。まず、最も注目すべきは、棟の直下に柱を立てる、いわゆる「中柱」形式がとられていることである。中央の柱筋にかかる架構では、その中柱が、その前後2本の側柱の頂部に架け渡された大梁の上にたつ束に代わっている。一方、左右柱筋の架構では両側柱はその頂部の位置で中柱と横架材によって連結されている。中柱および束は、合掌部分まで到達しておらず、その頂部に置かれた水平な横木で斜梁に結合されている。棟から両側柱の頂部を挟み込むように合せ梁が直線状に架かっている。その先端は建物前後の細い角柱まで達している。斜梁上に直接、母屋材が載り、薄板の垂木が等間隔に敷かれ、その上に二重に瓦が葺かれている。なお、当家の屋根勾配は8.4/10とかなり急である。このような中柱を用いた架構は、すでにベトナム中部や南部の民家でみられたものであり、その関連や系譜は非常に興味深い。

4. 建築的特徴

4.1 主屋の平面構成とその類型

ゲアン省の伝統的民家において、最大の特徴は家屋中央部に他よりも広い柱間を取った「七尺の間」と呼ばれる空間を有することであり、「外の間」、「七尺の間」、「内の間」の三つの空間から成っていることである。「外の間」および「内の間」の間口は、1間から3間であるが、「七尺の間」の間口はいずれの例でも1間のみである。これら三つの空間はどれも奥行を揃え、凹凸なく横並びに配される。

そこで、ゲアン省の伝統的民家の平面構成を、これら三つの空間の間口数によって、以下のように六つに大別する(図7)。

- 1) 2+1+2型: 「外の間」2間、「内の間」2間
- 2) 3+1+1型: 「外の間」3間、「内の間」1間
- 3) 3+1+2型: 「外の間」3間、「内の間」2間
- 4) 3+1+3型: 「外の間」「内の間」とも3間
- 5) 3+0+0型: 「外の間」のみ
- 6) 1+3+1型: 「七尺の間」がなく、「外の間」3間で、その左右に1間の「内の間」

第三次調査の対象事例25例中、「3+0+0」型は12例あったが、そのうち9例は生活用のための建物ではなく、いわゆる「祠堂」として用いられていた。残り3例のうち1例は、当初間口6間の家屋から縮小されたものであった。他の2例は当初から間口3間の建物で、小屋板銘や棟木銘から、1842年および1911年にそれぞれ建設されたものである。また、1+3+1型は調査事例のなかでは1例のみで、聞き取りによると、フエから移築されたものである(No.133)。

その他の類型はすべて1間の「七の間」が家屋のほぼ中央部に設けられているもので、全体の平面構成は非対称となる。前述したように、これまでベトナム全土を対象に進

められてきた調査結果からすれば、当初から非対称の平面構成をとることはゲアン省以外ではみられなかった。つまり、「七尺の間」を含む非対称平面の民家は、ゲアン省独特と言えるが、その理由はこれまでのところよくわかっていない。「七尺の間」の起源、その本来の用途、変遷の過程などは解明すべき事項として残されている。

また、これまで各地方で一般的に見られた建物前面の吹き放ちの柱廊によるヒエンは比較的稀であったことも注目されよう。

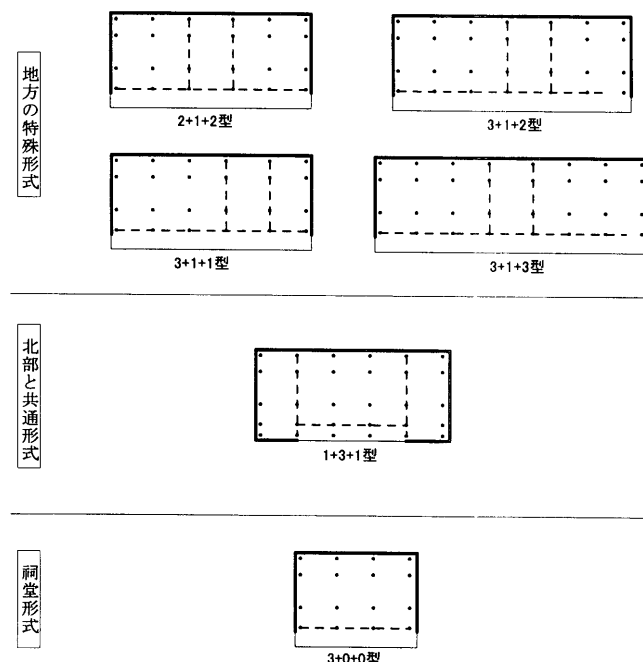


図7: 平面形式の類型

4.2 主屋の架構型式

【斜梁の形式】ゲアン省の伝統的民家における架構では、屋根の傾斜に沿って架かる斜梁を柱および束の頂部を挟み込む合せ梁とするものと、湾曲した海老状の斜梁とするものの、2種に大別できる。明らかに、後者はバクニン省やナムディン省など北部における民家と強く関連した手法であると考えられる。一方、前者はゲアン省でみられる独特の手法であると思われる。通常、こうした合せ梁は棟木から軒先まで一材とすることが多いが、No.382やNo.128などにみるように、室内で合せ梁を用い、ヒエンなど正面側室外で海老状斜梁を用いる場合もある。合せ梁と海老状斜梁を併用することは、梁の形態になんらかの意味や意図をもたせていると思われる。合せ梁を用いた6例の中で、建設年代が判明したものはNo.115のみで、1933年であった。その他の事例では、聞き取りによって、No.344-1が18世紀末頃まで遡りうるが、残りの4例はせいぜい100年ほど前の建設であろう。一方、海老状の斜梁を用いた19例のなかで、年代の分かった最も古い建設年代は1867年(No.279)

であった。当該の民家主屋は親のために4人の娘が協力して建設したという謂れが記された文書が現存するもので、かなり確実な年代であると思われる。

つまり、ゲアン省では、海老状斜梁は年代的に比較古い時代からあるもので、その形態には一種の格式のようなものが意識されたものではなかろうか。一方、直線的な合せ梁は年代的には新しいものであろうと思われるが、後述する架構型式をも考慮し、今後その起源等を検討する必要がある。

【奥行方向の架構型式】まず、現時点まで調査してきたベトナム北部地方の民家ではゲアン省しか見られない型式がある。事例No.384にみられる架構は最も簡略化しており、横架材の1本のみで中央柱の2本を貫通し、横架材の上に天井が張られている。この民家は1942年に建設され、現存の状況から判断して、建設当初の姿を伝えるものであろう。今回の調査におけるこの種の架構型式は本例のみであったが、この型式の流れは時期的にもう少し遡りうると考えられる。また、他の北部地域ではあまり見られない棟木の直下に柱または束を配された型式がみられた。第三次調査対象25例中で3例、No.141、No.94、No.344-1がこれに該当する。これらの架構はいずれも小規模な民家にみられた。この型式はベトナムの中部から南部にかけての民家にしばしばみられる架構型式で、それらとの類似性・関連性が考えられよう。No.94は棟木銘により1911年に建設されたものである。No.384およびNo.344-1の建設年代が不明だが、聞き取りによると19世紀末頃に遡りうる。

これらゲアン省に特有な架構型式は、おそらくは原始的な竹組みの手法をそのままに木造に転化したものではないかと考えられる。

上述の架構型式のほか、これまで調査・考察を進めてきたベトナム北部の民家に共通した、正柱・側柱・海老状斜梁などから構成される架構型式もある。それらについて、従来からの着目点により、以下の三つの型式に区別することができる。

- 1) II型：2本の正柱とその前後にたつ側柱を横架材によって側柱上部の位置で連結したもの（2例）
- 2) III型：前後どちらかの正柱を省略し、1本の正柱とその前後にたつ側柱を横架材によって側柱上部の位置で連結したもの
 - III(1)：前方の正柱を省略したもの（16例）
 - III(2)：後方の正柱を省略したもの（4例）
- 3) V型：2本の正柱とも省略し、両側柱をその頂部で繋いだもの（4例）

全体として考察事例数が少ないものの、現存するゲアン省民家の架構型式としては、III型、とくにIII(1)型が最も一般的なものであろう。III(1)型の16例中で最も古い

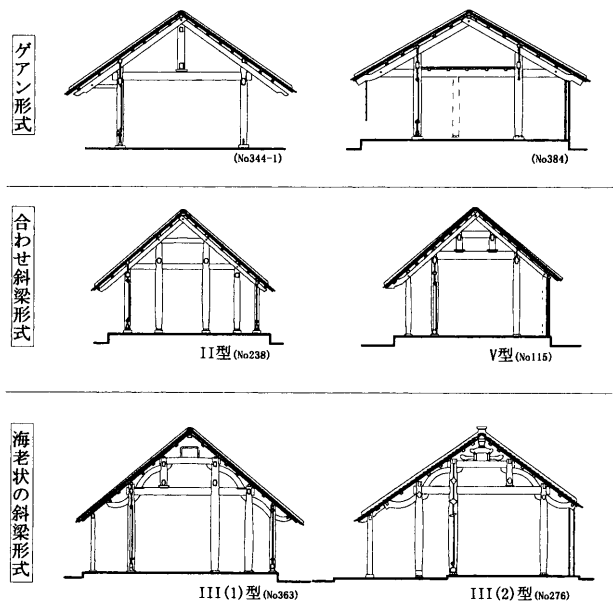


図8：断面形式

民家は1862年（No.302）の建設であった。II型は2例、V型は3例とかなり少数となる。ただし、同じ架構類型を用いた北部地方の民家、とくにバクニン省のものと比べると、ゲアン省の民家はその規模において格段に小さくなることを留意する必要がある。

架構の類型と斜梁の種類との相関をみると、中柱型およびゲアン型の4例すべてが合せ梁の斜梁を用いる。一方、事例が最も多かったIII(1)型では、2例を除いて残りは海老状の斜梁を用いる。II型は2例のみで、それらは海老状斜梁を用いず、合せ梁を用いている。なお、No.238は当初にはII型で、1951年に「外の間」では前方の正柱1本が、また「内の間」では正柱2本ともがそれぞれ省略されたものである。また、III(2)型の4例はいずれも海老状斜梁を使用する。そのうちNo.88は1842年に建てられた民家で、比較的古い例である。V型においては合せ梁を用いた例と海老状斜梁を用いた例とがみられる。

【小屋組】第三次調査の対象事例25例中、小屋組を識別できるのは17例で、いずれも軸組に海老状斜梁が使われているものである。それらを形態のうえから以下の四種に分けられる。

- 1) A型：小屋梁の上に斗状部材を介して、横木を配するもの（9例）
- 2) B型：小屋梁の上に斗状部材を介して2本の束がたち、その頂部に横木を配し、束から挿し肘木が1段出るもの（5例）
- 3) 板状型：小屋梁の上に板状部材で埋めるもの（4例）
- 4) 合掌型：小屋梁の上に直線の斜梁で合掌を形成するもの（11例）

5) その他：(1例)

まず、最も事例の多い合掌型に注目したい。11例中で建設年代を判明した最も古い例はNo.94で、1911年である。ほかは、聞き取りなどからおおむね19世紀末から20世紀前期までのものである。次にA型をみると、ゲアン省ではすべて横木は一段のみで、最古例はNo.279で、1867年である。一方、B型はわずか5例であるが、建設年代としては1862年(No.302)、1877年(No.72-1)など比較的古い民家が含まれている。板状型でも1842年(No.88)および1877年(No.71-1)に建設された民家がみられた。上述のA型およびB型は、北部バクニン省の系統に通じ、また板状型はナムディン省でもよく見られたものである。合掌型の源流は、おそらく竹組構造にあると思われる。

架構型式との相関をみると(表4)、II型および中柱型、ゲアン型の架構型式においては、合掌型の小屋組と組み合わせられる。一方、III(2)型の架構では、A型と合掌型の小屋組と組み合わせることはなく、B型および板状型と組み合わせられる。事例数が少ないため、十分に検討すること

表4：小屋組の類型別および架構型式と相関

架構形式	A	B	板状	合掌
II				238 270
III(1)	60 61(1, 2, 3) 72(2) 279 346(2)	302 72(1)	71(1) 276(2) 363	382 344(2) 346(1)
III(2)		329 276(1) 133	329 88	
V	176 203			115 128
中柱				141 94 344(1)
ゲアン形式				384

は困難であったが、すべての小屋組型式と組み合わせられているIII(1)型は、19世紀中頃まで確実に遡ることができる。合掌型の小屋組と組み合わせる民家は、III(1)型の事例より時代的に古くはないが、竹造との関連を考えるうえで貴重である。

4.3 柱および柱間の寸法

【柱間寸法】ゲアン省の伝統的民家における桁行方向の柱間寸法について検討してみよう(表5)。まず、「外の間」の柱間についてみると、No.238とNo.344-2の2例は正面に向かって左の柱間(以下「外1」と呼ぶ)が後代に縮小されているため、考察対象から除けば、中央の柱間(「外2」)は左右の柱間より広い。「外2」の柱間の最小値は1,755mm(No.238)、最大値は2,820mm(No.88)、ほかに29例中24例は2,200mm以上である。

つぎに「内の間」の柱間では、正面に向かって左側の柱間を「内1」、右側を「内2」とすると、8例中5例において「内2」の柱間が「内1」より狭くなり、「外の間」から離れるにしたがって次第に縮小されている。17例中12例において、「内の間」の柱間のほうが「外の間」の柱間より狭く(No.231、115、382など)、4例でほぼ同寸法(No.346-1、344-1、384、329)、2例で「内の間」の柱間の方が「外の間」より広い(No.363、270)。

また「七尺の間」の柱間寸法は、すべての事例において、「外の間」「内の間」いずれよりも広くとられている。その最小値は1,880mm(No.279)、最大値は2,860mm(No.346-1)、平均で2,499mmであった。このように他の柱間より広くとられた「七尺の間」は、主屋のほぼ中央におかれ、ゲアン省

表5：柱間寸法(桁行・奥行方向)と柱寸法

No	建設 年代	平面 形式	桁行方向の柱間(左間から)							断面 形式	斜梁 形式	奥行方向の柱間					奥行方向の柱(径/長さ)					
			外1	外2	外3	七	内1	内2	内3			ヒエン	正・側	正柱間	正・側	側・壁	正柱	側柱	ヒエン柱			
302	1862(妻板銘)	3+0+0	2250	2500	2250					III(1)	海老状		1000	1600	1050		220	3500	250	2800		
329	1936(妻板銘)	3+1+2	1935	1985	1960	2240	1945	1080		III(2)	海老状		995	1680	1005		190	3350	180	2590		
141	19c末(開取り)	3+1+0	?	2255	2250	2310				中柱	合わせ梁	740	1500	1500	820		180	3140	160	2470		
176	1883(家譜)	3+0+0	2130	2470	2125					V	海老状		2040	835	845				180	2650		
203	?	3+0+0	2190	2390	2190					V	海老状	2580*	820	1280	840				200	2600		
231	19c末(開取り)	3+1+1	2135	2285	2530	2015	1940			III(1)	海老状	1660*	1095	1555	875	880	210	3640	180	2835		
238	19c末(開取り)	3+1+3	945	1755	1725	2162	1672	1655	?	II/III(1)	合わせ梁		970	1440	960	570	150	3005	150	2120		
60	19c末(開取り)	3+1+2	1985	2365	1965	2750	2140	1950		III(1)	海老状		1005	1505	1030	870	190	3340	180	2595		
68-1	1945(妻板銘)	3+1+1	2087	2552	2102	2820	2467			III(1)	海老状			2820	1120		220	3540	210	2620		
68-2	-	3+0+0	2365	2795	2330					III(1)	海老状		1215+1750		1205		210	3600	190	2690		
68-3	-	3+0+0	2207	2510	2195					III(1)	海老状		1167+1790		1200		200	3550	180	2550		
71-1	1877(家譜)	3+1+(1)								III(1)	海老状			3500			240	3220				
71-2	1902(妻板銘)	3+0+0	2250	2360	2250					V	特集		1220+1655		1185		235	3520	210	2705		
72-1	1877(妻板銘)	3+1+1	2180	2315	2175	2765	2290			III(1)	海老状		1105+1730		1145	770	190	3675	180	2675		
72-2	-	3+0+0	1800	2395	1762					III(1)	海老状		1030+1530		1030		190	3170	190	2495		
88	1842(妻板銘)	3+0+0	2580	2820	2560					III(2)?	海老状		1170	1750	1150							
94	1911(棟木銘)	3+0+0	2030	2250	2020					中柱	合わせ梁		1550+1550		950							
276-1	1625(開取り)	3+0+0	1780	2600	1830					III(2)	海老状	1530*	1060		2800	740	210	3580	190	2965		
276-2	1946(移築)	1+1+2	1837			2210	1820	1370		III(1)	板状		995+1550		940		190	3280	170	2490		
279	1867(扉書)	3+1+1	1780	1990	1740	1880	1800			III(1)	海老状			2390	910	720	180	3085	180	2390		
270	1924(妻板銘)	2+1+2	1490	2030		2260	2140	2010		II	合わせ梁		1160+1700		1180	830	220	3345	200	2435		
115	1933(妻板銘)	3+1+2	1950	2000	2155	2450	1960	1760		V	合わせ梁	815	760+1025+760		870		180	3250	160	2600	130	1670
128	1870(開取り)	3+1+1	2300	2355	2335	2725	2025			V	合わせ梁	1240	860+1205+840		915		210	3330	190	2590	120(角)	
133	19c末(開取り)	1+3+1*	2090*	2760*	2870*	2745*	2260*			III(2)	海老状			2230	2305+1445	640	220	4495	190	3460	160(角)	
363	19c末(開取り)	3+1+1	2175	2362	2182	2630	2460			III(1)	海老状	1190	1095+1590		1050	740	190	3800	180	2655	120(角)	1730
382	1890(開取り)	2+1+2	1645	2230		2570	2185	1702		III(1)	合わせ梁		1035+1810		1045	760	200	3580	190	2650		
384	1942(開取り)	2+1+2	2425	2427		2835	2410	2435		ゲアン	合わせ梁		1190+1940		1500		200	3370	160			
344-1	18世紀末(家譜)	3+1+2	2170	2340	2170	2760	2220	?		中柱	合わせ梁		1920	1920			220	3970				
344-2	-	3+0+0	870	2340	1510					III(1)	合わせ梁		870+1070		870			3230				
346-1	100年(開取り)	3+1+1	2300	2440	2290	2860	2205			III(1)	合わせ梁		1170+1760		1225	830	210	3173	210	2383		
346-2	-	3+0+0	2070	2480	2070					III(1)	海老状		1180+1640		1180			3920	230	3020		

に特有な空間である。その起源について、その用途・機能について、今後さらなる考察が必要であろう。

家屋奥行方向の柱間寸法は、これまで調査・考察の終えた他の省の伝統的民家の柱間と比較すると、最も狭いものであった（表5）。例外的と思われる架構型式をもつNo.71-1を除けば、正柱間の柱間で2,000mm以上の例は存在しなかった。正柱間の最小値は835mm（No.176）で、最大値は1,940mmであった。側柱と正柱の柱間も同様に狭く、最大値でも1,200mmしかない。

【柱寸法】第三次調査対象事例25例中、最大の正柱は径240mm（No.71-1）で、径200mm以上の例は15例しかなく、その数値も200～220mmの間である（表5）。北部の民家などと比較すると、かなり細い正柱が用いられている。正柱の長さは中柱型式の例とNo.141を除いて、ほかすべての事例で3,300mm以上となる。最長は4,495mm（No.133）で、3,500mm程度が最も一般的な柱長さであろう。側柱の径は正柱のそれとあまり数値的に差がないことが注目される。また、側柱の長さは2,600mm～2,800mmの間である。要約すると、ゲアン省民家には比較的細く、短い柱が用いられ、一つの家屋で柱に大きな格差が認められない。

むすび

詳細に考察できた対象が25例と少なかったが、ゲアン省における伝統的民家には、これまで調査された地域とは異なる独特の平面形式および架構型式が認められた。家屋全体の規模は、比較的小さく、その平面においては「外の間」・「七尺の間」・「内の間」の三つの空間からなる非対称な構成が一般的であった。この非対称の平面構成をとる主たる理由でもある「七尺の間」が、これらの空間のなかでとくに注目される。柱間1間だけの空間であるが、ほかの柱間より広くとられ、間仕切り壁やアクセスのための扉口、正面側の開口部にも特徴がみられ、非常に興味深い。その起源および用途については今後、さらなる資料の収集と研究が必要であろう。また、架構型式についても、直線的な板を合わせた斜梁や棟木直下におかれた柱や束が、もっとも興味をひく。これまで調査された事例は、いずれも19世紀半ばを遡ることはできない、比較的新しいものばかりであり、これらの部材の歴史的発展や展開を論じることはまったくできない。むしろ、これらの木製部材の導入はさほど古い時代ではないのかもしれない。一般の農民の間で素朴な形で作られていた民家の形式が、木造に置き変わっただけであるのかもしれない、そうした時代は18世紀以前まで遡ることはあるまい。